

十勝にも遅い春が駆け足で近づきつつある。蝦夷紫ツツジが薄紫の花を付け、白樺やカラマツが芽吹き始めている。芝地も青々と萌え始めた。

雪融けのこの時期、公園や道路沿いなど公的部分でのゴミの散乱が目立つ。公衆道德といふかマナーが廃れているのだろうか。美化の一環として、帯広駐屯地の第4普通科連隊陸曹会の会員及び家族250名余が、帯広の森運動公園一帯の奉仕作業を4月21日、第五特科連隊曹友会の隊員・家族総勢500名がこれまた恒例通りにグリーンパークの美化奉仕作業を27日に実施する予定である。

さて、こうして雪が融けて周りを見渡すと、今まで気づかなかったのだが、当地十勝の庭木は殆どがイチイ（一位）の木である。勿論、小生の官舎にも植えられている。

何故、かくも一位の木が庭木として珍重されるのであろうか。イチイは学名 *Taxus cuspidate* 別名 アララギと言われ、和名がイチイである。北海道・東北では、オンコの名前で呼ばれている、常緑針葉樹であり、高さは15m、直径は1mにまでなる。直径が70cmより大きいのは、極めて少ないと言われている。帯広駐屯地5師団司令部庁舎前の樹齢不詳（幹周りからの推定によると300～400年：帯広営林署員の話）のオンコの木は目通り約70cm（幹周り長210cm余り）であり、希少価値のあるものである。上端部は枯れ、割れ目もあるが、老いて尚、意気軒昂である。枝分かれした部分には、蝦夷紫ツツジが一株咲いていた。

このような銘木の要件は備えているようだが、残念ながら十勝の銘木百選には選ばれていない。この一位の「御神木」（5師団の御神木と称して良いのではなからうか。）が何故此処にあるのか、その由来は詳らかではない。何れにしろ永年に亘り、第5師団と帯広駐屯地とそこに勤務する隊員諸官を見守ってきたのは事実であり、この御神木のお陰で第5師団が精強性を保持し続けているのではなからうか。（参考：オンコは年に0.5～0.7mm成長するので、幹周りが解ると樹齢を推定しうる。）

御神木の一位の写真



アイヌの人々は、この木をオンゴ(コ)と呼んで、神の宿る木として大事にしてきた。オンゴの木は、地球が恐竜時代の頃に現れ、爾来、その耐陰性に富み、寒さにも雪にも強い性質から、長い生命を永らえ、洋の東西を問わず不老長寿の木として重宝されてきた。「福助の木」とか「疫病を払う木」として各所に植えられてきた。

このような不老長寿性と木理が斉一で材がやや重厚な割には、仕上げ面が良好で光沢がある。更には、反り、割れなどの恐れも少なく、曲げ加工も容易であり、心材の保存性は抜群に良い等の性質から、床柱、一刀彫等の細工物、表札等に使用される。

このようなオンゴであるが、和名では、「イチイ」と言う。「イチイ」は「一位」であり、朝廷における官位の「正（従）一位」の一位であり、高貴な木であることの証明である。仁徳天皇時代に正一位の貴人が持つ「笏（しゃく）」（下記参照）を全国から集めた所、飛驒の国から献上されたこの木が、品といい、木理といい最も優れていたもので、これこそ木の中の一位だとその名を賜ったとも言われている。

『参考：「笏」とは、官位にある者が礼服（らいふく）または束帯を着用する際、威儀をととのえるにあたって右手に持つ細長い板をいう。中国ではコツと呼び、すでに周代から使われていた。日本ではコツの音が骨に通ずるところからこれを嫌い、またその長さが1尺であったことから〈しゃく〉と称するようになった。旧一万円札の聖徳太子が右手に持っているのが「笏」である。』

イチイは、雌雄異株で、北海道から九州及びアジア東北部に分布して、やや暗い林の中に純林を作る。雌株の種子は、秋になると種子の周りを包んだゼリー状の仮種皮が赤く熟すが、これが甘くて美味しい。然し、中の種子は呼吸麻痺を起こすアルカロイドであるタキシンという有毒物質を含んでいるので注意が必要だ。葉にも毒性がある。幼き頃に食べた記憶があるが、果たして、その時、種子はどうしたのだろう。

オンゴと言えば、焼尻と言われるぐらいに、有名で、「オンゴの荘」は、樹高3mほどで、枝が放射状に広がり、直径が10m以上であるとか。「一位」の変種であるキャラボクは、高さ1～2mの匍匐性低木になる。